

生きていることば

—— ブレイクの『ジェルサレム』 ——

川 津 雅 江

I

ブレイク (William Blake) にとってことばは単なる記号ではなく肉体性を備えるものであった。「聖なることば」が古^{いにしへ}の森の中を散策し、口から発せられた「ことば」が戦車に乗って虎を制禦する⁽¹⁾。ブレイクはこれらの表現をことばを擬人化⁽²⁾して言っているのではない。ことばは字義通り生きていて眼に見える。ロビンソン (Crabb Robinson) はブレイクの体験を次のように伝えている。

he (Blake) told me yesterday that when he writes -- it is for the Spirits only -- he sees the words fly about the room the moment he has put them on paper. And his book is then published⁽³⁾.

ことばがどのような姿で部屋を飛び廻るのか我々には想像し難いが、ブレイクにはそれが見えていた。これは詩作における彼の信念を十全に物語っている。すなわち、ブレイクにとって詩人のことばは肉体性を備えているべきなのである。

ブレイクの最後の大預言書『ジェルサレム』(Jerusalem, 1804-20) は、彼がことばに対して抱く神聖さと肉体性を神話化している。詩がクライマックスに達したアポカリプスの描写部分で、詩人は「あらゆることば、あらゆる文字は

／人間だった」(“every Word & Every Character／Was Human,” J 98 : 35-36) とことばの化^{インカーネーション}肉を讃歌する。ことばの化肉の思想の根底には、ヨハネによる福音書第一章によることばから人間へ受肉するロゴス神話が潜んでいることは言うまでもない。そしてブレイクは、詩の最終行でロゴス神話を逆転し、人間からことばへ回帰する方向を示す。「はじめにことばありき」ならば、終わりにことばありきなのである。それ故詩が「ジェルサレム」ということばで終るのは深長な意味を孕んでいると言わざるを得ない。何故『ジェルサレム』の詩⁽⁴⁾は「ジェルサレム」で終るのか。ここにブレイクが同預言書においてことばに執拗なこだわりを持った理由が隠されていると思う。本稿では、『ジェルサレム』におけるロゴス神話と逆ロゴス神話を辿り、ひいてはブレイクが唱える詩人のことばの持つ力について考えてみたい。

II

『ジェルサレム』は永遠界と墮落世界、一の存在と多の存在、想像力と合理精神、聖なる都エルサレムと墮落した都バビロンなどの二項対立を提示する。そして前者の事項を回復するための闘いを行きつ戻りつ反復して描く⁽⁵⁾が、普遍の人アルビオン (Albion) の神話に的を絞れば、彼の墮落から歴史の舞台を経て最後に救済と再生まで物語は進展する⁽⁶⁾。

アルビオンの墮落は真正の流出 (Emanation—アンドロギュノスの永遠界の人間の女性的部分) であるジェルサレム (Jerusalem) の代わりに、偽りの流出であるヴェイラ (Vala) を妻としたことに起因する。また彼はイエスからジェルサレムを隠しイエスに背信したため、「聖なる幻想」(“the Divine Vision”) を見失い、墮落する。そのときアルビオンからジェルサレムをはじめとして森羅万象が流出し、天地創造がなされる。アルビオンのヒューマニティ (Humanity)⁽⁷⁾は墮落の眠りにつき、墮落した男性原理のアルビオンの幽魔 (Spectre) は想像力と対極の「合理力」(“Rational Power”) を誇り、またヴェイラは「女の意志」(“Female Will”) によってアルビオンを牛耳る。アルビオ

ンの再生は森羅万象が再び身のうちに収まり、ジェルサレムと同一化することで達成される。

アルビオン神話の大筋を述べたが、ここで本稿に関わりのある、従来その重要性が看過されがちであった事柄に触れねばならない。すなわち「舌の門」(“The Gate of the Tongue”)たる西門が最後の審判まで閉じていることである⁽⁸⁾。舌はことばを話す器官であるので、それが閉じていることはことばを発することができない。つまり墮落したアルビオンには言語能力がないのである。しかしアルビオンの幽魔やヴェイラは言うに及ばず、墮落の眠りについてははずのアルビオンのヒューマニティも冗舌すぎる程冗舌に話す。それなのに何故墮落したアルビオンが言語能力を失っているといえるのか。推定される理由は、彼らが話すことばは墮落世界のことばであり、永遠界のことばではないからであろう。では永遠界のことばはどのようなものであろうか。『四人のゾア』(*The Four Zoas*, 1795–1804)第六夜には、永遠界では自然界の動物や事物が人間とことばを交わすが、そのようなことばは墮落世界ではもはや聞かれないとある。

A Rock a Cloud a Mountain

Were now not Vocal as in Climes of happy Eternity

Where the lamb replies to the infant voice & the lion to the man of years

Giving them sweet instructions Where the Cloud the River & the Field

Talk with the husbandman & shepherd.

(FZ 71a : 4–8)

ことばは、可視的であれ不可視的であれ、常に聞き手に向けられるもの、すなわちコミュニケーションの媒介物である。聖書によれば、原初ことばは一つであったが、バベルの塔においてことばの統一性は破壊され、ことばは分化した。そのため異なることばを話す者同志は互いにコミュニケーションを計ることができなくなった。ブレイクはかようなコミュニケーション不能状態を墮落と

みなし、人間を含めた森羅万象に適用しているのである。

『ミルトン』(Milton, 1804-08)では、永遠界における人と人とのことばの交換を次のように記している。

As the breath of the Almighty, such are the words of man to man
 In the great Wars of Eternity, in fury of Poetic Inspiration,
 To build the Univers stupendous : Mental forms Creating
 (M30 [33] : 18-20)

ヨハネによる福音書第一章第三節によれば神のことばによって森羅万象が創られたが、神のことばと同じく永遠界のことばも創造的なものである。ブレイクは創造を詩的靈感によるものと規定し、永遠界のことばが詩のことばであることを暗示する。

『ジェルサレム』では、永遠界の人間の会話はからだとからだを交わらせておこなうのだと描写される。永遠界のことばはロゴス＝イエスが人間である様に人間の肉體性を備えているのである。

When in Eterniy Man converses with Man they enter
 Into each others Bosom (which are Universes of delight)
 In mutual interchange. and first their Emanations meet
 Surrounded by their Children. if they embrace & comingle
 The Human Four-fold Forms mingle also in thunders of Intellect
 But if the Emanations mingle not ; with storms & agitations
 Of earthquakes & consuming fires they roll apart in fear
 For Man cannot unite with Man but by their Emanations
 Which stand both Male & Female at the Gates of each Humanity
 (J 88 : 3 -11)

肉体性を備えたことばの交換によって会話はなされるが、それにはまず流出が交わり合わなければならない。ブレイクの作品では、流出は通常アンドロギュノス的な永遠界の人間の女性的部分のことをいう。しかし『ジェルサレム』においてだけは、流出は男女両性に言及され⁽⁹⁾、源なるものから流れ出たものという本来の意味を強調している。上述の引用においても、流出はヒューマニティが他者とコミュニケーションを計る際に、最初に自己から他者へ流れ出すものである。従ってコミュニケーションの基盤である流出が身の内になければ、会話は不可能である。アルビオンは自分の流出をジェルサレムではなくヴェイラであると見誤った結果、墮落してジェルサレムをからだの外へ出してしまう。彼はもはや永遠界のことばを取り交わすことができない。彼は永遠界のことばを失うのである。

アルビオンが永遠界のことばを失っているということは、『ジェルサレム』の「最後の審判」(“a Last Judgement”)⁽¹⁰⁾部分を読むとき、読者が常に念頭に置かねばならぬ事柄である。何故なら最後の審判時森羅万象がアルビオンに同化する過程は、アルビオンをはじめ全てのものが永遠界のことばを話すようになる記録だからだ。その記録を詳細に調べてみれば、アルビオン神話はことばについての神話であると判明するであろう。

最後の審判はプレート94の「時は終わった」(“Time was Finished !,” J 94 : 18)から突然はじまる。アルビオンの上に「神の息吹」(“The Breath Divine”)がかかり、最初にイングランド (England) が目覚め、アルビオンの覚醒を促す。

Her voice pierc'd Albions clay cold ear. he moved upon the Rock
 The Breath Divine went forth upon the morning hills, Albion mov'd
 Upon the Rock, he open'd his eyelids in pain ; in pain he mov'd
 His stony members, he saw England. Ah ! shall the Dead live again
 (J 95 : 1-4)

アルビオンの覚醒は、『ジェルサレム』の冒頭で詩人ブレイクがイエスの声

を聞いて目覚めた情況に酷似している。ブレイクは目が覚めてから神が口述する同預言書を書き留める。同様にアルビオンも詩人になったと断ずることができる⁽¹¹⁾。靈感は「神の息吹」によってアルビオンに吹き込まれ、その後彼は詩のことに匹敵する「人のかたちをした永遠界のことば」(“the Words of Eternity in Human Forms,” J 95:9)を語るのである。しかし彼はブレイクと違って詩人のままではない。プレート96でイエスの贖罪に続き、アルビオンは自らも溶鉱炉に身を投げ詩人のからだを消滅させる。再生したアルビオンはジェルサレムの覚醒を促すことばを発するが、これはブレイクにはイエスが語ったように聞こえる。アルビオンはイエスと一体になって甦ったのである。これはアルビオンがイエス＝ロゴスになったことを示している。

ブレイクは、アルビオン神話を創造した当初から、ロゴス神話を念頭に置いていたらしい。『四人のゾア』第一夜のはじめには、余白にヨハネによる福音書第一章から「ことばは神であった。(中略)そしてことばは肉体となり、わたしたちのうちに宿った」が引用されている。そしてこの書き込みは本文中の「普遍の人」(“The Universal Man,” FZ 3:6)の文字に並置して記され、アルビオン神話とロゴス神話の関わりを暗示している。

『四人のゾア』では両神話の関わりは提起されたにとどまるが、『ジェルサレム』ではロゴス神話がアルビオン神話に完全にとり込まれ、アルビオン＝イエス＝ロゴスを明示する。再生したアルビオンは神になる。いや肉体を備えたことばになると言うべきか。アルビオンが再生したあと、詩はアルビオンがことばになる径路を諄諄として説くのである。

アルビオンに続いて、「四つの生き物」(“Four Living Creatures,” J 98-24)たる四人のゾアが救済される。ヨハネ黙示録第四章第六節に「(神の子の)御座のそば近くそのまわりには、四つの生き物がいたが、その前にも後ろにも、一面に目がついていた」とある。ブレイクはそれらをアルビオンの四つの基本相——肉体、理性、情念、想像力——の象徴とみなし、四人のゾア(Tharmas, Unizen, Luvah, Urthona-Los)に具現化した。四人のゾアもアルビオンの墮落に伴い彼から分離したのだが、最後の審判で各々あるべき位置に戻る。そして

彼らは次の引用にあるように、「劇的な幻想のかたち」(“Visionary forms dramatic”) で語り合う。

And they conversed together in Visionary forms dramatic which bright
 Redounded from their Tongues in thunderous majesty, in Visions
 In new Expanses, creating exemplars of Memory and of Intellect
 Creating Space, Creating Time according to the wonders Divine
 Of Human Imagination, throughout all the Three Regions immense
 Of Childhood, Manhood & Old Age [;] & the all tremendous
 unfathomable Non Ens
 Of Death was seen in regenerations terrific or complacent varying
 According to the subject of discourse & every Word & Every Character
 Was Human according to the Expansion or Contraction,
 the Translucence or
 Opakeness of Nervous fibres such was the variation of Time & Space
 Which vary according as the Organs of Perception vary & they walked
 To & fro in Eternity as One Man reflecting each in each & clearly seen
 And seeing : according to fitness & order.

(J 98 : 28-40)

「劇的な幻想のかたち」とは何か。それは「舌」から飛び出したものだという。ならばことばであろう。このことばは「人間の想像力」によって、「記憶や思惟能力の模範」、「空間」、「時間」、「幼年期、壮年期、老年期」の生と「死」を創造する。『ミルトン』では永遠界のことばが神の創造的なことばに等しい詩のことばであるといわれていたが、ここでも四人のゾアが交わすことばは詩的創造力をもつことばである。そして「あらゆることば、あらゆる文字が／人間だった」と明示される。四人のゾアのことばもプレート95でアルピオンが語る「人のかたちをした永遠界のことば」に相当する。アルピオンの再生に続き、

四人のゾアも再生して永遠界のことばを話すようになるのである。肉体性を備えたことばの交換により、自己と他者との間の垣根はなくなり両者は渾然一体となる。四人のゾアは永遠界を「ひとりの人間」のように歩き、「互いに互いを映し、はっきり見られ／見る」ようになる。

次に森羅万象の再生が描かれる。ここでブレイクはロゴス神話に暗示された方向を逆転させるべく、森羅万象の人間化を描くのである。すなわち、ロゴス神話ではことばが人間になるが、アルビオン神話では人間がことばになる。そのためには森羅万象は前もって人間になっていなければならぬ。こうしてプレート98で「獅子、虎、馬、象、鷹、鳩、蠅、虫／それに驚くべき蛇」(J 98 : 43-44) が人間になり、プレート99では「木や金属や土や石も」(J 99 : 1) 人間になる。詩の終結を告げるプレート99の全文は以下の如くである。

All Human forms identified even Tree Metal Earth & Stone. all
 Human Forms identified, living going forth & returning wearied
 Into the Planetary lives of Years Months Days & Hours reposing
 And then awaking into his Bosom in the Life of Immortality.
 And I Heard the Name of their Emanations they are named Jerusalem
 (J 99 : 1-5)

「すべての人間のかたち」がアルビオンと再合一して一存在になったとき、もはや自己と他者の区別はなくなる。森羅万象は互いに同一のものである。フライ(Northrop Frye)はこうしたヴィジョンがメタファによって表現されると説明する。彼によれば、メタファは「同一化の表現法」である⁽¹²⁾。「その勇者はライオンだ」とメタファでいうとき、勇者は勇者、ライオンはライオンのままである。これを言い換えれば、森羅万象は「本質」(essence)において一なるものであるが、「同一性」(identity)において多なるものなのである⁽¹³⁾。本質と同一性は「一＝多」の関係であり、それがメタファによって結びついている。

本質と同一性の関係は、詩の最終行において、「すべての人間のかたち」の流出が「ジェルサレム」と名付けられることによってより鮮明になる。アダムが獣たちに最初の名前を与えたときはじめて、獣たちは認識論的に存在するものになったように、命名は名付けられた当のものを他のものと区別する方向に働く。ことばによって名付けられてはじめて、ものは個として認識される。命名のあとは、ときに名前がその当のものよりも先行し、身元確認の有力な手掛りとなる。このような命名の重要性をブレイクは詩の最終行で考えていたに違いない。何故なら“they are named Jerusalem”の“they”は前文中の“their Emanations”を指すことは明らかであるが、文のつながりは極めて不自然である。“I heard the Name of their Emanations”のあとでは“the Name”を“it”で受け、“it is Jerusalem”というのが自然な文の流れであろう。従ってブレイクは何らかの意図を持って“they are named Jerusalem”と言ったと考えられる。つまり、前半の文にある名詞の“Name”を後半の文で動詞の“named”に変化させてまで、ブレイクは名前と命名にこだわる必要があったのだ。

明らかに“they are named Jerusalem”は異なる人を同一の名前のもとに命名する行為を描いている。「すべての人間のかたち」の流出の名前が「ジェルサレム」と名付けられるならば、「すべての人間のかたち」の名前はアルビオンである。本質と同一性の関係を示す「一＝多」は同名異人ということなのである。人間化した木や金属や石もすべてアルビオンという名前であるが同一人物ではない。このように『ジェルサレム』の最終行を読むと、ブレイクが如何に名前をその当のものよりも優先させたかがわかる。彼にとって、名前ということばははじめであり終りである。森羅万象がアルビオンということばになり、それらの流出がジェルサレムということばになったとき、アポカリプスは完結するのである。

ことばから生まれたものはことばに帰る。ロゴス神話から逆ロゴス神話への道こそ、アルビオンの墮落と救済神話が辿る道である。ブレイクはこの道をアルビオンが失われたことばを求めての径路として描く。そしてアルビオンの道案内をするのが想像力と詩想の具現者ロス (Los) である。ロスはアルビオン

を墮落から救済する任務を荷い、ことばを創造する。このことばは、次章で詳述するように、永遠界のことばに等しい性質をもつ。とはいえロスが創造したことばをアルビオンに与え、彼の救済を推進したとは言いがたい。終末は、プレート94で「神の息吹」がアルビオンにかかって、突然起こったからだ。

しかしながらロスが創造したことばと永遠界のことばの類似性を鑑みれば、ロスはアルビオンの救済への道案内人であるといえる。つまりロスが創造したことばはアルビオンが取り戻すべきことばを反映しているのである。また、ロスを詩人ブレイクに重ねて考えれば、ロスの言動はブレイクの芸術観の真髄をあらわしている。それではロスが創造したことばとブレイクの芸術観の関わりについて次にみてみよう。

III

ブレイクはロスのことばの創造を以下のようにいう。

(I call them by their English names : English, the rough basement.

Los built the stubborn structure of the Language, acting against
Albion's melancholy, who must else have been a Dumb despair.)

(J 36 [40] : 58-60)

ロスが創った“the stubborn structure of Language”には二重の意味が込められる。一つはアルビオンが喪失したことばを回復するための「確固たる言語構造」であり、いま一つは言語でできた「堅い建造物」である。前者の言語構造は英語のそれであることは引用文に言及されているが、そこにおいても建築用語の“basement”を用いて英語が「荒けずりの下部構造」と記される。つまり、ロスはことばを使って何か建築物を創ったのである。これが芸術の都たるゴルゴヌーザ (Golgonooza) である。ゴルゴヌーザの建築材料は「しっかりと固定した、決して忘れられぬ、うまくしつられたことば」(“well cont-

rived words, firm fixing, never forgotten," *J* 12 : 35) である⁽¹⁴⁾。ことばから成るゴルゴヌーザは詩作品を象徴している。しかもそれはブレイクの彩色印刷本の体裁をとっている。次の引用の "Sculptures" や "carved" の語に注意したい。

All things acted on Earth are seen in the bright Sculptures of
 Los's Halls & every Age renews its powers from these Works
 With every pathetic story possible to happen from Hate or
 Wayward Love & every sorrow & distress is carved here
 Every Affinity of Parents Marriages & Friendships are here
 In all their various combinations wrought with wondrous Art
 All that can happen to Man in his pilgrimage of seventy years

(*J* 16 : 61-67)

ゴルゴヌーザのロスホールの城に彫られたものすべてが墮落世界で起こった出来事である。天地創造から至福一千年までの「六千年間に存在したものすべて」(*J* 13 : 59) が雲散霧消することなくゴルゴヌーザに刻まれる。これは、たとえば『ジェルサレム』のような作品に六千年間の歴史が文字として存在することを指し示すが、逆に言えば、作品に描かれた内容が真の歴史であるということである。詩人のことばがこの世界を創り、時のはじめから終わりまで掌握していると言ってもよい⁽¹⁵⁾。

このように想像的創造主としての詩人のことばは天地の創造主としての神のことばにその創造性において同一視されるばかりか、ことばの具体化においても等しいのである。ことばから森羅万象が生じたように、詩人のことばは音声であれ文字であれ必ず具体的なものを創るのだ。この考えは、ブレイクの詩論として、グレイ (Thomas Gray) の『吟唱詩人』(*The Bard*) を題材にした絵の解説中にあらわれてもいる。

Weaving the winding sheet of Edward's race by means of sounds of spir-

itual music and its accompanying expressions of articulate speech is a bold, and daring, and most masterly conception, that the public have embraced and approved with avidity. Poetry consists in these conceptions……

(E 541)

今日でも “weave” という動詞は “weave a story” という使われ方をするが、ブレイクにとってそれは決してメタファではなかった。詩とは文字通りに音楽やことばで「エドワード一族の経帳子」を織ることである。詩人のことばが具体的なものを織りなすと考えたからこそ、ブレイクは己れの分身たる想像力の具現者を “Los” と命名し、彩色印刷本を象徴する芸術の都を “Golgonooza” と称したのだと思う。“Los” は “Logos” の短縮形であり⁽¹⁶⁾、一方 “Golgonooza” は “logon zooas” (=the “living word,” ピリピ人への手紙2: 16) を内包している⁽¹⁷⁾。ブレイクはロスによることばの創造に託して、詩人のことばの本質を説いたのである。

創造性とその具体化において詩人のことばは神のことばに一致するので、墮落世界にいる詩人は神に限りなく等しい存在であるといえる。それ故アルピオン神話においてロスだけが永遠の生命を保持し、「聖なる幻想」を維持する。彼は墮落した他の者たちの眼には見えない「聖なる幻想」をことばで伝える。「聖なる幻想」をロスのことばで知覚できるようになったとき、人は墮落から救済されるのである。別様に言えば、詩人のことばは墮落世界において「聖なる幻想」を持つために人間が使える唯一の手段なのである。特に字に書かれたことばには力があるとブレイクは考える。彼は『ミルトン』で書^{ライティング}字が「神の黙示」(“the Divine Revelation,” M 42 [49]: 14) であるといい、またゴルゴヌーザにあるロスの「酒ぶね」(“Wine-press”) の働きを自らの彩色印刷に重ねて、次のように述べている。

This Wine-press is call'd War on Earth : it is the Printing-Press

Of Los ; and here he laps his words in order above the mortal brain
As cogs are formd in a wheel to turn the cogs of the adverse wheel.

(M 27 [29] : 8-10)

ロスの「酒ぶね」は現実には「印刷機」のことである。「印刷機」は人間の頭に理路整然とことばを刷りながら、黙示へと回転の輪をすすめるのである⁽¹⁸⁾。

以上述べてきたように、ブレイクは詩人のことばが持つ力を確信していた。それ故にこそアルビオン神話においてロスが創造したことばはアルビオンが求めるべき永遠界のことばを反映しているのである。ロスが日夜奮闘する芸術の営みは、実は墮落の眠りを貧るアルビオンが行うべき営みなのである。しかし詩人は神ではない。このことをブレイクは充分承知していて、自らを神の直接の口述で詩を書く書記^{セクレタリ}にすぎないと言う⁽¹⁹⁾。また詩のことばを表記する書字も神からの賜物であると考え、アルファベットの制度はカナンのセム語に源を溯ることができる⁽²⁰⁾ので、ブレイクはモーセがシナイ山で神から授けたものは道徳法というよりも実はアルファベットであったとみなしている⁽²¹⁾。

ブレイクは常に神イエスを想像力と同義に置いている⁽²²⁾。神であれ想像力であれ、そこから生身のブレイクは受身的に詩のことばを受けとる。それ故に彼は「想像の世界に対して過度に文字通りのリアリスト」⁽²³⁾であった。そしてかような芸術観からすれば、部屋を飛び廻ることばを見て、それを紙に置いたら本ができたという彼の発言は、誇張でも奇異でもないのである。

IV

『ジェルサレム』におけるアルビオン神話は詩人と神の区別を明確にしている。最後の審判時アルビオンは詩人になるが、その後詩人の肉体を消滅させてイエスと一体になり、とどのつまりことばそのものになる。このことばは肉体性を備えた永遠界のことばである。しかし我々は肉体性を備えたことばが如何

なる姿をしているのか説明することはできない。それは、ことばを交わし合うことによって想像的な創造をなすという、機能面のあらわれだけで存在が確認される。それ故アルビオンの失われたことばを求めての旅は何にもましてジェルサレムを求める旅となる。何故なら、ジェルサレムは「都市」として、イギリス（アルビオンはその古名）に新エルサレムを建設するというブレイクの壮大なヴィジョンを満たすために不可欠の名前であるが、そればかりではなく、ジェルサレムには次のような象徴があるからだ。すなわち、ジェルサレムは「聖なる幻想」たるイエスから流れ出た透明な「光」、イエスを覆う透明な「衣」であり、また「想像力」を取り囲む「靈感の娘ら」の統合体である⁽²⁴⁾。前にも述べたように、流出とは何か源になるものから流れ出たものの謂であるので、アルビオンの流出としてのジェルサレムは、源のイエス（＝想像力）から四方八方に放射する靈感を象徴することになる。アルビオンが想像的創造をなすことばになるのは、ジェルサレムという靈感を身の内に収めたからである。彼は詩人の肉体を滅し、詩人のことばとなったのである。

『ジェルサレム』を詩人のことばの喪失と奪回の物語として読むならば、詩が「ジェルサレム」で終るのは極めて深い意味を持っている。これは、詩のことばは想像的な創造をなすが故にその存在が確認されるということを的確に物語っている。ことばはジェルサレムという靈感によって創造的な詩のことばになり、また詩のことばであると認められるのである。その意味で詩はアルビオンではなくジェルサレムということばで終わらねばならなかった。ブレイクは、肉体性を備えたことばをこのように描くことにより、自らの詩論をアルビオン神話に昇華させたのである。

注

- (1) SE, "Introduction"; J 55 : 34-35. ブレイクの商品からの引用はすべて *The Complete Poetry & Prose of William Blake*, ed. David V. Erdman, rev. ed. (Berkeley : Univ. of California Press, 1982) に拠る。SE, FZ, M, J, VLJ はそれぞれ *Songs of Experience*.

Four Zoas, Milton, Jerusalem, "A Vision of the Last Judgment" の略である。散文の場合は頁数の前に E をつけて示す。

- (2) 十八世紀新古典派詩人が好んで用いた "personification" は当時の機械主義思想を反映し、"generalization" と "abstraction" への要求を満たしたものであったが、ブレイクにとって十八世紀的な擬人化の用法は批判の対象であった。十八世紀の擬人化については次を参照。Bertrand H. Bronson, "Personification Reconsidered," *ELH*, XIV (1947) ; Earl R. Wasserman, "The Inherent Values of Eighteenth-Century Personification," *PMLA*, LXV (1950) .
- (3) G.E. Bentley, Jr., *Blake Records* (London : Oxford Univ. Press, 1969) , p. 324.
- (4) 作品は詩がプレート99で完結し、そのあとに絵だけのプレート100が置かれる。
- (5) 以下の評者は『ジェルサレム』の特徴が文体的にも内容的にも反復構造にあるとみなしている。Stuart Curran, "The Structures of *Jerusalem*," in *Blake's Sublime Allegory : Essays on The Four Zoas, Milton, Jerusalem*, ed. Stuart Curran and Joseph Anthony Wittreich, Jr. (Wisconsin : Univ. of Wisconsin Press, 1973), p. 340 ; Karl Kroeber, "Delivering *Jerusalem*," in *Blake's Sublime Allegory*, p. 351 ; Susan Fox, *Poetic Form in Blake's Milton* (Princeton : Princeton Univ. Press, 1976) , p. 14.
- (6) Northrop Frye は『ジェルサレム』の四章を四幕の劇（墮落、墮落世界での人間の奮闘、神人による世界の救済、アポカリプス）に分けた。プロットに進展性を認めている人は他にもいる。この点は、Frye, *Fearful Symmetry : A Study of William Blake* (Princeton : Princeton Univ. Press, 1947), p. 357 ; Karl Kiralis, "The Theme and Structure of William Blake's *Jerusalem*," in *The Divine Vision : Studies in the Poetry and Art of William Blake*, ed. Vivian de Sola Pinto (New York : Haskell House, 1968) , pp. 139-62 ; Henry Lesnick, "Narrative Structure and the Antithetical Vision of *Jerusalem*," in *Visionary Forms Dramatic*, ed. David V. Eardman and John E. Grant (Princeton : Princeton Univ. Press, 1970), p. 394 等を参照。
- (7) ブレイクによれば、人間は墮落して四つの様態 (Humanity, Emanation, Spectre, Shadow) に分裂する。cf. *J* 15 : 6-7.
- (8) *J* 13-6, 11 ; 14 : 26. cf. *FZ* 5 : 43, 21 : 11.

- (9) シロー (Shiloh) は男の流出である。cf. *J* 49 : 47-48.
- (10) 『ジェルサレム』の最終絵プレートは詩が描く最後の審判が“The Last Judgment”ではなく“a Last Judgment”であることを明示する。この点については拙論「沈黙の言葉——『ジェルサレム』最終プレートの意味」、『英文学』第61号（早稲田大学英文学会、昭和60年）参照。
- (11) Thomas R.Frosch, *The Awakening of Albion : The Renovation of the Body in the Poetry of William Blake* (Ithaca & London : Cornell Univ. Press, 1974), p. 105.
- (12) Frye, “Note for a Commentary on *Milton*,” in *The Divine Vision*, p. 107.
- (13) ブレイクはスウェーデンボリ (Emanuel Swedenborg) への注釈で、「本質が同一性と同じならば一つしか同一性はない。しかしその考えは誤りである。(中略) 故に唯一無二の本質は本質であって同一性ではない」(E604) と言っている。
- (14) V.A.De Luca の指摘に拠る。“Blake and the Two Sublimes,” *Studies in Eighteenth-Century Culture*, vol. XI (Wisconsin : Univ. of Wisconsin Press, 1982), p. 100.
- (15) ちなみにロスは「時間」と呼ばれ、時を自在に操る。cf. *M* 24 [26] : 68.
- (16) James Rieger, “The Hem of their Garment,” in *Blake’s Sublime Allegory*, p. 274.
 他の説として、S.Foster Damon は時の支配者として“Sol” (太陽) のアナグラム、Harold Bloom は詩的名声を意味するチョーサー的“loos,” Morton D.Paley や David V.Erdman らは“loss”などからだとする。Damon, *William Blake : His Philosophy and Symbols* (1924 ; rpt. London : Dawson’s of Pall Mall, 1969), p. 69 ; Bloom, “Commentary,” *The Complete Poetry & Prose of William Blake*, ed. David V.Erdman, p. 907 ; Paley, *Energy and the Imagination : A Study of the Development of Blake’s Thought* (London : Oxford Univ. Press, 1970), p. 65 ; Erdman, *Prophet Against Empire* (1954 ; rpt. Princeton : Princeton Univ. Press, 1977), p. 253.
- (17) Nelson Hilton, *Literal Imagination : Blake’s Vision of Words* (Berkeley : Univ. of California Press, 1983), p. 236. また Leopold Damrosch Jr. に拠れば、ゴルゴメーザは化肉とキリストのはりつけのための新たなゴルゴタ (Golgotha) である。*Symbol and Truth in Blake’s Myth* (Princeton : Princeton Univ. Press, 1980), p. 318.
- (18) Robert F.Gleckner に拠れば、“adverse wheel” は“the wheel of Revelation or prophe-

cy”を指す。“Romanticism and the Self-Annihilation of Language,” *Criticism*, X VIII (1976), p. 180, n. 11.

(19) バッツ (Thomas Butts) 宛の書簡 (25 April 1803) を参照 (E 728-29) .

(20) Frye, *Fearful Symmetry*, p. 416.

(21) J3 でブレイクが読者に呼びかけることばを参照せよ。

(22) 一例を挙げれば、*The Laocoön* には次のような記述がある。

The Eternal Body of Man is The IMAGINATION.

God himself	}	
that is		[Yeshua] Jesus we are his Members
the Divine Body		

It manifests itself in his Works of Art (In Eternity All is Vision)

(E 273)

(23) W.B.Yeats, *Essays and Introductions* (1961 ; rpt. London : Macmillan, 1980) , p. 119.

(24) J 54 : 1-3 : *VLJ*, E 554.